

永享二〇年（一四三八）、長い間、両者のなかに立って仲裁してきた鎌倉府執事（のちの関東管領）・上杉憲実に対して、足利持氏が兵を差し向けた。主君に刃を向けられては致仕方ない。上杉憲実は、幕府に救いを求める以外に術はなかった。

憲実を庇護すると、幕府はこれを合戦の理由とした。その名目は

「幕府への謀叛」
に他ならない。

幕府勢は関東へなだれ込み、持氏討伐という大義名分のもと、鎌倉を攻めたのである。在地豪族は選択肢に悩んだ。鎌倉公方に附くか鎌倉府執事（その背後にいる幕府）に附くか、その大きな分水嶺を迎えることとなる。

この戦いで足利持氏は敗れ、その嫡男・義久ともども自害して果てた。

これを「永享の乱」という。

永享の乱が関東の豪族たちに与えた余波は大きかった。

鎌倉公方に附いたがために、没落の道を強いられた者たちは、絶望しながらも

「王家再興」

を夢に描いたまま、じつと潜伏し苦難に堪えた。というのも、持氏の遺児たちが、永享の乱を逃れたからである。

将軍家は、この行方を捜すよう尽くした。

が、手懸かりの掴めないまま、月日だけが流れた。

永享二三年（一四四二）、下総国結城城で、持氏の三人の遺児が挙兵した。春王丸・安王丸・永寿王丸の幼児を旗頭としたのは、結城城主・結城中務大輔氏朝である。関東足利家に忠節を誓い、その再起を懸けての挙兵であった。

この戦さは総じて、結城籠城を巡る攻防戦である。結城氏朝に呼応して馳せ参じたのは、小山・山川といった同族や近隣の同調者たちで、その数およそ二万。対する幕府勢はおよそ一〇万。これは各種軍記物と呼ばれる資料によるも

ので、恐らくは誇張された表現で正しい数字ではない。が、それくらいの兵力差があるのだという、一種の比喩表現といってよい。

先の戦いで摘み残した芽を刈り取るために、幕府は類を見ない動員をした。そのことだけは、疑うべくもない事実である。

このとき結城城に籠城した上州の者がいる。
里見修理亮家基。

新田源氏の末裔であるこの里見氏は、南北朝動乱期に大きく家を割った。すなわち棟梁である新田義貞と行動を共にした者と、上州に留まり足利氏に従った者と、である。そして、上州里見氏は後者であり、持氏の遺児を守護する意地で結城に馳せ参じた忠義の徒を自負していた。結城城を巡るこの戦いは、永享二三年三月に籠城を開始してから、陥落敗戦をする翌年四月一九日まで、なんと、一年以上の時間を費やしている。

とにかく、例えるならこれは、妥協なき意地の戦い、という表現が相応しい。実に熾烈な戦いであったことが、『結城戦場記』や『永享記』といった史料からも伺える。

陥落間際、結城氏朝は春王丸・安王丸を女装させて逃したが失敗し両名は捕縛、永寿王丸さえも捕らえられ

「もはやこれまで」

と、遂に討ち死にして果てたのである。

これを、関東では「結城合戦」というが、幕府からは淡々と「結城氏朝の乱」と称された。

結城氏と、これに連座した者を、一言で

「謀反人」

そう称したのである。

里見家基は結城氏朝等と共に、玉砕の道を選んだ。これもひとつの忠義である。この玉砕にあたり家基は一子・義実を招き寄せた。

「父は、父の戦いのもと、意地を通して死ぬつもり。されど、そちは生きて逃れるべし」

義実と一緒に死ぬことを望んだ。

しかし、家基は遂に許さなかった。

「足利の若様は捕らえられた。十中八九、首を

打たれよう。されど、世は一寸先に何が起きるか判らぬもの。若様が生き存えれば、この一戦の無念を晴らすときがくる」

「父上」

「いいか、死ぬなよ」

家基は死に場所を得るとともに、義実に見望みを託したのである。

捕らえられた関東足利公方の遺児たちは、將軍・足利義教自ら詮議を行うこととなり、京へ護送された。その護送途中、永寿王丸が急病になり、ふたりの兄が先を急いだ。

しかし、義教ははじめから、遺児たちを生かすつもりなどない。

神託という名の〈籤引き〉で選出された還俗將軍でありながら、義教は敵に対して容赦のない、執念深き人物だった。

美濃国垂井の金蓮寺において、春王丸・安王丸は処刑された。敵の血統を遺すことこそ元凶なり。そういうわんばかりの、残虐な処断であった。

夢酔 藤山

義教は逆らう者を容赦しない残忍性があった。当時の諸国大名は、足利義教の性癖を〈万人恐怖〉と呼び、恐れた。ささいなことで、いつ首が飛ぶかも判らない。義教という將軍の治世は、こうして保たれていたといつてよい。

が、薬も過ぎれば毒となる。

結城氏朝の乱が平定されて僅か二ヶ月後。

嘉吉元年（一四四二）六月二四日、その戦勝祝賀の宴を催している最中に、信じられない事件が起きた。

「万人恐怖、覚悟！」

なんと、幕府重鎮のひとり、播磨守護職・赤松満祐が、突如、將軍・足利義教に襲いかかり、それを斬り殺してしまったのである。

「関東の次は、いよいよ己なり」

流言飛語に赤松氏は怯え、それを打開する選択肢のひとつとして、凶行に走ったのである。

この將軍暗殺にあたり、幕府は一瞬、組織としての機能を喪失した。この一件を、〈嘉吉の乱

という名で日本史は留めている。

白昼堂々の將軍暗殺。

しかし、結果的にこの事件が、永寿王の生命をつなぎとめたのである。

永寿王。

のちの初代古河公方・足利成氏である。

この足利成氏の存在が、関東に足利家と上杉家というふたつの主を生み、権力構図の矛盾を引き摺りながら、再び争乱の種をまき散らしていく。

これが、関東争乱の、直接的なはじまりであった。

十十十

関東争乱（2）